

令和八年四月度 御報恩御講拝読御書

曾谷入道殿許御書

文永十二年三月十日

五十四歳

仏ほとけの滅後めつごに於おいて三時さんじ有あり。正像しょうぞう二千余年にせんよねんには猶下種なおげしゆの者もの有あり。

例れいせば在世ざいせい四十余年しじゅうよねんの如ごとし。根機こんきを知らしずんば左右そうな無なく実経じつきようを与あた

ふべからず。今いまは既すでに末法まつぽうに入いつて、在世ざいせいの結縁けちえんの者ものは漸々ぜんぜんに衰微すいび

して、権実ごんじつの二機にき皆みな悉ことごとく尽つきぬ。彼かの不軽菩薩ふきようぼさつ、末世まつせに出現しゆつげんし

て毒鼓どつこを撃うたしむるの時ときなり。

## 令和八年四月度 御報恩御講 『曾谷入道殿許御書』 (御書七七八頁一五行目〜一七行目)

## 【通釈】

仏の滅後に三時ある。正法・像法の二千余年には(過去世に)下種を受けた者がいた。たとえば在世四十余年(の衆生)のようなものである。衆生の機根を考えないで、むやみに実経を与えてはならない。今はすでに末法時代に入り、釈尊在世に結縁した者は次第に少なくなり、権実の二機の衆生は悉くいなくなった。彼の不輕菩薩が、末法に出現し毒鼓を撃つ時である。

## 【主な語句の解説】

根機：機根に同じ。仏の教えを受け入れ、実践できる能力のこと。

結縁：仏が衆生に化導を施して縁を結び、未来の成仏・得道の切っ掛けを与えること。

権実の二機：総本山第二十六世日寛上人が『依義判文抄』に「権は即ち熟益の機、実は即ち脱益の機」(六巻抄一〇九)と指南されるごとく、権機は熟益の機類、実機は脱益の機類のこと。

不輕菩薩：法華経常不輕菩薩品第二十に釈尊の過去世における因行の姿として説かれる菩薩。あらゆる迫害に耐え、人々の仏性を礼拝する修行を貫いた結果、法華経を聴聞して六根清浄の果報を得、後に諸仏を供養讚歎し法華経を弘めて成仏したとされる。

毒鼓を撃たしむ：毒鼓とは、毒薬を塗った太鼓のこと。涅槃経に「毒鼓を叩いた音が耳に入るだけで命を失う」(大正蔵一一一四二〇A趣意)とある。相手が耳を貸さなくとも、強いて法華経を聞かせて仏縁を結び、仏性を薰発させる化導を譬えたもの。

## 【背景と大意】

本抄は、文永十二(一二七五)年三月十日、日蓮大聖人御年五十四歳の時、身延から下総国の檀越・曾谷教信と太田乗明に与えられたお手紙です。両名は、大聖人の下総弘教によって帰依したと伝えられ、数々の法難に遭遇しても変わらぬ信行を貫いて、富木常忍と共に、門下の中心的役割を果たしました。

本抄の冒頭部分で大聖人は「夫<sup>それれ</sup>以<sup>も</sup>れば重病を療治するには良薬を構築<sup>こうさく</sup>し、逆・謗を救助するには要法には如かず」(御書七七七)と示し、末法の衆生が謗法罪によつて苦悩する姿は重症患者のごとくであり、その病を治癒するには、末法適時の要法である南無妙法蓮華経を信受する以外ないことを明かされています。また拝読の箇所では、末法は法華経の行者が人々に妙法を下種する時であることを教えられます。そして最後段では、釈尊一代の聖教を集めて欲しい旨を兩人に託されるところにも、今後法令法久住のため、広宣流布のために一層精進するよう激励し、本抄を結ばれています。